

私訳と解説（「エン・クリスト」誌第9号から転載）

## 汝知り給う

――詩篇第139篇――

1982年5月

小池辰雄

### 【詩篇第139篇】（私訳）

(1) 楽長によるダビデの絃歌

1 エホバよ、あなたは私を推し測り知り給う。

2 あなたは知り給うわが坐るをも立つをも、

3 わが歩むをもわが臥すをも汝は探知し、

4 わが路をことごとく熟知し給う。

5 げにわが舌に一言もないのに、

6 見よ、エホバよ、汝はそのすべてを知り給う。

7 後べより前方より汝は私を包み、

8 しかも私に按手し給うた。

9 霊しきかな、及びもつかぬ知なるかな、

10 高きかな、到底これに如くべくもない。

11 私は何処へ往つて汝がみ霊を離れようや、

12 何処へ遁れて汝がみ顔を離れようや。

13 たとい天に昇るとも、そこにあなたが！

14 わが床を陰府に布くとも、見よ、汝が！

15 曙の翼を執つて海の極にてに住むとも、

16 そこにすら汝が手は私を追跡し、

17 汝が右の手は私を捕らえよう。

18 私は言った、「真つ暗闇が私を蔽い、

19 私を包む光が夜となるように！」

20 闇すらも汝の前には闇とならず、

21 夜も昼のように輝き

22 闇も光も一如である。

23 まことに汝はわが五臓をつくり、

24 わが母の胎に私を組み成し給うた。

25 私は感謝する、私は畏るべく奇しく創造られた、



奇しきかな汝がみ業!

15 わが骨は汝に隠れてはいなかった、

私が隠れたところで造られ、

地の底で織り成されたときに。

16 未だ成らざる私を汝が眼は見給い、

その形づくられた日々は

汝が文書にことごとく記された、

それらの一つとして洩れたものはない。

17 神よ、私に汝が思念如何に貴重なる哉!

その総体は如何に強大なる哉!

18 それらを数えようとすれば、

砂粒よりも多い。

気がついて見れば、

私はなおも汝と共に在る。

19 神よ! 願わくは悪しき者を殺し給え!

流血の徒輩よ、私を離れ去れ!

20 彼らは悪るだくみをもて汝に逆らい、

汝が敵は虚りを語っている。

21 エホバよ汝を悪む者を悪んでいるではないですか。

汝に逆らうものを嫌っているではないですか。

22 全き悪しみを以て彼らを悪んだ、

彼らは私に対して敵であった。

23 神よ、私を探知し、わが心を知り給え、

私を試みてわが思念を知り給え。

24 もしや我に邪曲な道あるやを見給え。

かくて永遠の道へ私を導き給え!

この詩篇は神と人間の関係を、汝と私との火のような現実の場として告白している実に特別な深さ熱さをもった詩篇である。全く知り、遍く在し、何でも造る實在に驚嘆して、どこまでも個なる「私」が、活き給う「汝」なる神に見られ、知られ、把えられている内実の詩篇!

第1節から第6節までは明かに神たる汝がわが一切を知り給うという告白。わが行動の一切を、わが思念の一切を汝は知り給う。「わが舌に一言も無いのに」声前の言を知り給う。「声前の一言千聖不伝」という句が禅道に言われているが、

「汝はそのすべてを知り給う」



というのである。しかも第5節では、汝の見えない手が私を包み、且つ按手あんしゅをし給うたと言っている。イスラエル宗教の靈的具体性、現実性がこういう表現に切々と表わされている。新約の光でこれを見ると、この手はキリストの手である。キリストの按手である。主はわが思いを知り、主はわが声前の言を聴き、主はわが行動を見、主はわがからだに手を按ぎ給う。此の如き高き深き主の顧みは「**靈すしくして及びもつかない**」。

第7節から第12節を見ると、主たる汝は「私が天に昇るとも」、「わが床を陰府よみに布くとも」、「曙の翼」即ち「旭光」に乗って海の極はてに住むとも、汝の手は私を追跡して来る。汝の右の手は力強くも私を捕らえ給う。汝の現前では、「闇も光も一如」で、みな汝の照明下にある。即ち、主たる汝のみ前から遁れることはできない。いついずこにおいても靈的な汝の現前である。

第13節から第16節は、汝は私を靈しくも創造し給うた神であり給う。五臓六腑、身体髪膚ごとごとく汝の創造のわざによって成った。単に肉体ばかりではなく、私という存在の形成未然に天界に詳しく記されているという。

第17節、第18節は謂わば、書きつらねて来た第1〜16節の内容全体に対して、感嘆して

「**汝が思念如何に貴重なる哉！ 汝がわざはいかに強大なる哉！**」

と叫んでいる。気がついて見ると自分は汝と共であった、汝からは離れられない、と告白している。

第19節から第22節は、何かこの詩篇にふさわしくなくないようにひびく、仇敵に対する悪しにくみを「汝」に訴えている。

第23、第24節は、おのがあやまりなき実存のため、汝の御顧みを心から祈って、「永遠の道」へと導入されんことを祈願している。

以上を概観すると、全知の神（1〜6）、遍在の神（7〜12）、全能の神（13〜16）が語られてはいるが、それを概念的な神学でとらえたのでは、詩の心からは、角度も次元もずれてしまう。

私は、冒頭で汝あなたと私という火のである現実だといった。然らばその火の如き現実と内実は何であろう。我々自身の問題として、この詩の心に迫ってみたい。抉えぐってみたいと思う。

「汝知り給う」の現実は何か。汝は神である、キリストであり、聖霊である。どれが前面に出るかは実存的にいろいろに変わる。どのように知り給うのか。その靈察を以てわが想念を内観し給う。その靈眼を以てわが行動を直視し給う。その靈耳をもてわが声前の言を聴き給う。さてこの「私」の想、言、行は何であるか。そこには善も悪もある。その度合、色調は神には隠されない。人の眼や思いにはしばしば誤り見られ、誤り思われる。善意もどれほど誤認誤解されるか、偽善をきらって直情径行的であると。しかしそんなときも「汝知り給う」といって平安に入るがよい。本ものは必ずいつか本ものとして証される。躓いたり、転んだりしたら、「主よゆるし給え」と平伏して前進すれば可い。相対的な善悪を気にする



ことはない。

汝、キリストが我らを見、聞き、把み給うのは、審かんがためではなく、救いへと見、聞き、把み給う。愛を以てゆるしを以て、見、聞き、知り、触れ給う。我々が空気から一瞬たりとも、いついずこに於ても離れることのできない自然的存在であるように、我々は神、キリスト、聖霊の現前からは、信仰の如何に拘らず、いついずこに於ても隠れることができない。神の霊眼、霊耳、霊手が我々を救いへと見、聞き、触れ給うのでなければ、到底やりきれない。而も既にキリストに於て贖罪は完了し、聖霊を以て光を与えつつ、生命を与えつつ、愛を与えつつあり給う。そういう神の顧みの目であり耳であり手であるので、我らはおのれを投げだした無者となつて、自由に思い、言い、行動できる。

こうなると「汝私を知り給う」は「私は汝を知り奉る」という応答になるのである。愛を以て知らるるとき、愛を以て知ることができてくる。

「汝心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主たる神を愛せよ」

の命令は、然り「愛せざるを得ず」となる。全的に顧みられ、愛され、ゆるされ、無者とされた者は、み霊を以て無限無量の質を賜るからである。であるから、ヨハネ書簡の

「太初より有りしもの、我らが聞きし所、目にて見し所、つらつら視て手触り

し所のもの、即ち生命の言」

の主体はキリストであることが深く肯かれるのである。

かくて、我らはキリストの眼光で見、キリストの耳で聞き、キリストの口で語り、キリストの手で触ることのできる霊的現実に入つてゆく。その質は愛である。その現実の焦点は、

「キリストわが内に」

「我れキリストの内に」

というエン・クリストである。

そのようにして人を見、人に聞き、人に語り（伝道する）、人に触れる（按手する）とき、福音の証者、行者として、人を救いへと見、人に救いへと聞き、人に救いへと語り、人に救いへと触れているのである。我のような奴が、十字架の罪のゆるしを全的に体受し、聖霊を全身に体受する現実となつて来たら、正直神秘的なことが、もう数えられぬほど起きており、豊かな内実がこぼれてゆく。誰に何と言われようとも、どう誤解されようと、白眼視されようと、そういう方々がお気の毒でならない。パウロと共に、そういう人々のため祈つてあげる。聖霊の愛の力がたさよ！

佐久間象山の

「余年二十以後及知匹夫有繫一國。

三十以後及知有繫天下。

四十以後及知有五世界。」

（余は年二十以後、乃ち匹夫も一國にかかわり有るを知る。）



三十以後、乃ち天下にかかわり有るを知る。  
四十以後、乃ち五世界にかかわり有るを知る。

という言は、正に自己の使命的存在から発した偉大なる告白である。すなわち象山は四十才以後になって、自分の存在が全世界と繋かかわりがあるものと覚知したのであった。

内村鑑三の

"for Japan,

Japan for the world,

the world for Christ,

and all for God!"

の自覚こそは「汝知り給う」の知に在っておのれの存在を霊知した千古の名言である。おのれを棄ててかかるとが故の愛国であり、愛キリストであり、愛神である。

「汝知り給う」の極致は即ち知らるる我が自らを無と知ったときである。パウロの如くおのれを「塵芥」と知ったときである（ピリピ3・9）。

かくて「汝知り給う」は「汝の知を賜う」となる。汝の霊知を賜り、汝の霊察を賜り、汝の霊耳を賜り、汝の霊手を賜る。要之、汝自身を賜るといふ全的な内実となる。原始生命、原始力、原始愛がこの罪びとに漲みなぎりてくるのである。そのような境地に在ると、遠隔の病者に霊の按手ができる。聖霊の汝がわが中に来りて祈り給うのである。私が祈っているのではない。私自身は祈りに絶しているのである。無言の異言、無声の霊歌が発している。噫、感謝せんかな聖名！ 噫、讚美せんかな聖名！

ホセア書第6章第6節でエホバがこう言っておられる、

「われは愛をよろこびて犠牲をよろこばず、知神をよろこぶこと燔祭にまされ

り」（私訳）

即ち預言者ホセアは神から深い愛の消息を身を以て啓示されたが、彼には知神（神を知ること）は神の愛を知ることであり、愛と知とは同義語であった。ホセアにとって「汝知り給う」は正に「汝愛し給う」であった。人を知ることとは正に人を愛することであった。それはむしろおのれ自身が犠牲的愛、燔祭的知を実存することであった。その極致を身証したのが十字架のキリストであった。

イエスこそは無言の行を以て「汝知り給う」を行じた神の僕であった。イザヤ書53・11に「わが義しき僕はその知を以て多くの人を義とし、彼らの不義を荷になわん」（私訳）

とある「知」は正に「贖罪愛」を預言しているものである。

「汝知り給う」、「汝我を知り給う」、「汝エン・クリストの私を知り給う」かくしずかになましいの底で祈るとき

「一切の秘訣を得たり」（ピリピ4・12）

である。アーメン、聖名に栄光あれかし。

